実践レポート

ディープラーニングを目指した大学教育における国際交流の試み

― 授業内学習から課外活動まで ―

カンダボダ B. パラバート

要　旨

本稿では、大学の教養科目の授業に付帯して行った正課外活動への試みについて報告する。大学生の正課外活動は、日頃の学びにおける学習成果を高め、ディープラーニングにも繋がると報告されている。正課外活動は、国内外生が混在することで学生の視野が異文化交流や国際理解にも広がり、国際的な学術交流も可能となる。ここでは、本学の国際教養科目群で提供したテーマスタディ授業を基に行った、国内外生を交えた学術的な国際的交流活動の促進における実践知の共有を行う。特に、正課内での学びを基に行った二つの正課外の活動と担当する教員の取り組みを紹介し、個々の活動から学生が獲得した学びを共有することを目的とする。

キーワード

実践的な学び、国際的学術交流、異文化理解、言語能力、国内外引率、深い学び

1. 序論

大学が持つ大きな役割は、教育と学生の研究活動を通した人材育成に取り組むことである。大学生は、正課内の授業を通して様々な知識や能力を獲得する。しかし、授業時間内だけでは学習した内容を実践することができず、足りない部分を補うため正課外活動が必要である（カンダボダ　他、2020）。理論的な枠組みで得た知識を応用できるという点において、正課外活動は学生に有意義な機会を与える。そのため、学生が正課に加えてその他の活動も経験することは学習成果の向上に繋がる。特に、授業に連携させて直接的に行う正課外活動は、学生の認知的、感情的、実存的な側面においてその思考などを変容させることもある（Scoffham & Barnes、2009）。大学生が参加する多くの課外活動は、多数の能力（例えば、企画力、行動力、応用力等）が培われる一方、学術的な学びを深められる効果もある。とりわけ、大学の授業内外における活動との連携を図ることで学習成果が高まり、能動的に取り組む姿勢が育まれる。中でも授業と連携した課外活動は、学生に学びの内容を直接的に試す機会が与えられ、学習成果に対する効果が高いと思われる。

本稿で紹介する取り組みは、学生にとって授業の学習成果が試されるものである。さらに、正課外活動は参加する学生だけでなく、教員にとっても様々なことが学べる貴重な機会である。特に、教員にとって、担当する授業と連携した課外活動は、授業で導入した内容・教材の実用性を図ることができ、実際の社会でどの程度に通用するかを体感することができる場であり、これより得た経験を活かして次の教育開発に繋げられる。また、研究面では、学生の取り組みを観察することで、日常の授業では気づかない学生の側面や自らの研究思考に繋がる些細な発見等を得ることができる。

次節では、まずアクティブ・ラーニングを基にした実践的な学びへの質的転換について触れ、共修を目的とする英語を介した学術交流の重要性について述べる。次に、3 節では、2019 年度の授業で実践した国際的な学術交流の取り組みを紹介する。そして、4 節では省察を試みて、最後の 5 節で稿のまとめを述べる。

2. アクティブ・ラーニングを基にした実践的な学びへの質的転換

教育におけるグローバル化に伴い、日本の大学教育も“受動的な学び”から“能動的な学び”に大きく転換し、アクティブ・ラーニングを導入することがより広く求められ、学生の主体的・対話的で深い学びができることを推奨されている（MEXT、2017）。とりわけ、教員が一方的に講義をする講義型授業から双方向型授業への転換が求められ、学生主体となる個人又はペアーワーク、或いはグループワークを導入する必要がある。結果、近年の大学教育の多くは多数のアクティブ・ラーニング手法を採用しており、正課内授業において今までと異なる質的転換の可能性を見出している。

しかし、双方向型授業において、学生は単にアクティブ・ラーニング活動に参加するだけでなく、実践的な活動を通して自らの変化を求めていくことが重要である。また、大学の正課内の授業における様々な壁や課題の存在も否定できない（Ito, 2017）。そのため、アクティブ・ラーニングを基に獲得する知識や能力をさらに活性化させるため、課外での実践が重要な役割を果たし得る。特に、教員と学生が正課内で直面する諸問題を解決するために授業と連携した正課外活動は、学生の日頃の学習を深い学び（ディープラーニング）に繋げる（Borredon et al., 2011;Cleveland-Innes & Emes、2005; Scoffham & Barnes、2009）。ディープラーニングとは、次世代に必要な認知能力と学問的知識を獲得するための手段であり、学生がこれらの能力を習得することで、柔軟的かつ創造的に考え、1 つの状況から新たな状況に学習を応用することができるようになる（Higher education, 2019）。学生が中心となる正課外活動（例えば、サークルやボランティア活動等）であっても単に無数の活動を提供しているだけではなく、学生にとって正課内で獲得できない無数の知識や能力を学べる機会を提供している（佐藤、2010; カンダボダ　他、2020）。しかし、学術的な交流という面では授業と連携した正課外活動のほうが学習成果と直接関連する点において意義深いといえる。

2.1　共修を目的に英語で実施する国際的な学術交流

教育のグローバル化に伴う日本の大学教育におけるもう一つの大きな変化として、英語教育が

挙げられる。今まで英語を介して読む・聞く・書く・話すという四技能を学生に身に付けさせることが主だった英語教育は、近年、英語を使って特定のテーマを学ぶ、議論するなどといった学術を行うための能力を育むような教育に様変わりしつつある。その背景の一つにあるのは、日本の教育・研究機関に入学してくる留学生の増加である。学内の留学生が増加することで、今まで日本語が主となっていた教育が今後は英語でも行えることが不可欠になってきた。その結果、高等校育における英語で開講する科目も増加している（Tanaka & Wake、2012）。

英語で開講する授業には学習効果を上げるために様々な工夫があると考えられる。例えば、大学の場合、講義にて国内学生と留学生を交えることで英語を介した学術交流の促進と国際理解を深めることが実現できる。まず、英語を介したコミュニケーションは、言語学習と運用の両側面において大きな役割を果たす。英語を学習する学生は、授業の回数を重ねるたびに自ら試行錯誤を行い、英語の多彩な使用方法を身に付けることができる。また、英語を母語とする学生においては、英語非母語話者の使用実態を把握することができ、母語を相手に分かりやすく話すための工夫ができる良い機会となる。特に、学生が正課外活動に参加する場合は、言語能力を最大限に発揮し、様々なタスクを実行することが求められる。正課内の教室での活動と違い、その場で発生する一つ一つの出来事に対応する力が不可欠である。このような臨機応変な対応力は、授業の各回を通して行う課題（例えば、ペアーワーク、グループワーク、ディスカッションやディベートセッション等）を経て習得することができ、学生同士のコミュニケーションを通じて国際理解も深まることが期待できる。結果的に、国内外を問わず全ての受講者は、英語を介して行う国内外生が共に学ぶ授業から、異なる言語・文化を背景により深い学術交流と国際交流ができるようになる。

とりわけ、英語で共修を目的とする科目を提供し、アクティブ・ラーニングからディープラーニングに繋げる工夫をすることで大学生は多くの学びが獲得できる。次節では、2019 年度の春学期と秋学期で実践した二つの取り組みを紹介する。

3. 学術交流と国際交流を混合した国内外での取り組み

ここでは、本学のテーマスタディ授業を基に行った国内外生を交えた学術交流活動の促進における実践知を共有する。特に、正課内での学びを基に行った二つの正課外の活動と担当する教員の取り組みを紹介し、個々の活動から学生が獲得した学びと今後の展望を共有することを目的とする。

3.1 自主性を要求する課題発見型学習

今回実践した科目は、テーマは春学期と秋学期は異なるものの導入する学習内容はほぼ同一的なものであった。2019 年度春学期には「Intercultural exchange with Asian students via Theme-based learning1」をテーマとし、同年秋学期のテーマは「Exploring Asian Culture via Project-based Learning（PBL in Sri Lanka）」とした。Theme-based でも Project-based でも受講生自らが課題を見つけ、調査の準備や実行、及び成果報告などにおいて積極的に参加することが求められる。課題発見型学習を導入することで、受講生はアクティブ・ラーニングの価値を見出し、授業

の回数を重ねるたび、試行錯誤をしながらディープラーニングに繋がる認知能力と学問的知識を獲得すると考えられる。そして、学生がこれらのスキルを習得することで、与えられる課題を全うするための力を身につけられる。

3.1.1　実践課題

今回の取り組みでは、まずそれぞれの科目において受講生が正課内活動をどのように評価するか、そして、正課外活動の学びは何かという実践課題を設けた。今回紹介する春期と秋期の二つの科目は、英語で学ぶ課題発見型授業であるという点では共通している。しかし、受講者（在籍状況・学部等）や正課外の活動場所（国内と国外）の二点で大きく異なっている。従って、上記の実践課題は、春学期と秋学期の科目間の評価と学習の効果を直接比較対象とせず、それぞれの科目に注目して行う。1 つ目の課題については、それぞれの科目での活動における受講生の評価を参照されたい。そして、2 つ目の課題では、各科目の受講者が参加した正課外活動から得た学びと今後の課題などを明らかにしたい。

3.2　国内外での実践

3.2.1　国内事例における授業概要、到達目標、参加者、正課内の工夫等

春期の授業名は「Intercultural exchange with Asian students via Theme-based learning 1」とされ、立命館大学の衣笠キャンパス（通称、KIC）にて英語で実施する科目として開講された。テーマスタディは、学部・正規非正規に関わらず受講することができる。この特徴を生かし、受講登録は学部・回生・正規・非正規等を問わず参加できるようにした。授業では、インターネットを活用した学外学生との遠隔交流を通して、国際交流に参加するための、コミュニケーションスキル、英語によるプレゼンテーション・スキル、コラボレーション・スキルを養い、学内と学外（アジアの）学生とのコラボレーションでは、プレゼンテーションの準備と国際交流大会における口頭発表を行うこととした。受講生に対しては、主体的な学びを深め、英語による異文化間コミュニケーション能力を実践的に学び、正課外活動として学外で開催される国際大会 World Youth Meeting（WYM）に参加することを目的とした[1)]。

科目の到達目標は次の 3 つを設けた。第 1 に、与えられたテーマを基に調査を行い、英語での発表ができるようになること。第 2 に、他国の学生の学習方略を理解し、英語で多国籍の学生とピア活動ができるようになること。第 3 に、ICT ツールの使用に習熟すること。これらの達成目標に伴い成績は「平常評価」とし、授業参加・貢献度、小発表、宿題及びその他のタスクと最終レポートを基に行った。また、これらの評価項目や基準については、授業開始前のオリエンテーションで説明し理解を求めた。授業は英語で実施する予定でいたため言語基準は TOEFL ITP®Test480 ～ 530（又は同等のほかの試験点数）と設定した。各回の内容とキーワードは付録 1.1 で示した。

春学期に実施した授業の当初の大きな目標は、学期末（8 月）に学外で実施される英語で行う国際的な発表大会に参加することであった。そのため、15 回から成る授業の第 1 回目から第 11 回目までは、多くのグループワークによるピアラーニング活動を導入した。さらに学習項目として、テーマ設定・調査計画と実施・データの分析・口頭発表および質疑応答への対応の仕方等を

取り入れた。12 回目からは、個人の力を発揮してもらうために個人プロジェクトを導入し、テーマを選び、調査の準備・実行と報告を行うことを求めた。グループの授業内活動を通して、調査企画・準備・実施・データ分析・成果報告までのそれぞれの過程で必要な学術的知識を身に付けられるように指導した。さらに、その後の国際大会での発表において授業内の学びを活かすことで、より深い学びへと繋げた。

正課内において、授業のシラバス設計、準備段階での受講生の多様性と導入する活動を念頭に置き、重点的な工夫を行った。まず、学生同士のインタラクションを最大限に増やすための活動の導入と時間を確保した。次に学生同士がインタラクションを円滑に進めていくために、導入時に必要なタスクの説明・個々の役割・成果物として求めるもの等を明確に把握できるようにし、何度も繰り返し確認を行った。また、先行研究でも指摘されているように、教員と学生のインタラクションの機会が減ると、学生同士のインタラクションを手助けする補助役が必要になってくる（カンダボダ＆鳥居、2020）。そのために、学内の teaching assistant（TA）制度を活用し、本学大学院修士過程に所属する留学生を一人採用した。また、授業の全体的なタスクと資料はいつでも確認できるよう学内ラーニングツール manaba ＋ R を活用し、アップロードするようにした。そして、日々の学習項目の確認ができるよう、数回にわたって振り返りを行う機会を設けた。特に、ピアラーニングによるグループワークや研究調査の過程における学術的な知識をしっかり把握してもらうために、受講者同士で互いに確認させ、必要であれば TA または担当教員から補足を行った。

今回の授業は、正課内活動に関連した正課外での活動への促進も意図していた。その導入編として、グループワークの準備を教室外で実施してもらうため 2018 年から 3 キャンパス同時進行となった Beyond Borders Plaza（BBP）施設を利用させてもらい、グループワークの集まりの場として考えた。加えて、グループ発表も BBP で行い、授業外の受講生や教職員の見学も可能とした。最後のクラスで、振り返りの時間を設け、受講生によって行われたプログラムの総括的評価（授業アンケート）を受講生全員と確認しながら担当教員から学生の評価に対してコメントを返し、今後の学びに必要なアドバイスをすることで正課内活動の終了とした。

上記のような内容を乗り込んだシラバスを学内のラーニングツール manaba+R にて公表した結果、19 名の学生が受講登録した（11 名日本人学生 + 8 名留学生）。しかし、初回の授業で、オンラインシラバスの計画をそのまま実行に移るのは難しいことが分かった。留学生の多くは SKP 生で[2] 8 月の国際大会の前に自身の留学プログラムを終了し、帰国するためである。加えて、日本人学生の数名も、大会当日と既存の予定が重なるため参加できないことが判明した。これら両者の登録ミスの背景にあったのは、学生によくある “ シラバスを十分に読んでいない ” ことだった。しかし、受講登録したからには何とか受講を継続してもらえるよう工夫を行った。その結果、国際大会に参加しない班（non-committee groups）と参加する班（committee-groups）に区別し、同じ授業の中で別々のルーティンで進められるよう再設計した（詳細は、付録 1.2 参照）。そのため、両班が同時に進行するものもあればそうでないものもあった。なお、国際大会に参加する班においては、授業内調査テーマを 2019 年の WYM の大会テーマ “Sense of inclusiveness” を参考に選択するよう指示した。

一方、授業に不随した正課外活動の国際大会 WYM に参加するためのサポートも併せて実施し

た。WYM 参加において、英語によるプレゼンテーションと国際交流に参加するためのスキルが求められるため、インターネットを活用した遠隔交流を導入して指導を行った。また、授業内で国際大会についての情報を共有し、参加者については有志を募った。その結果、受講生の内 6 名が 2 グループ編成で WYM2019 に参加することになった。1 つのグループは、韓国のチョンナム大学の学生 2 名とチームを組み、もう 1 つのグループは、台湾の中山大学の学生とチームを組んだ。5 月中旬から 7 月末の間は、ICT を活用して遠隔で連絡を取り合い、WYM のテーマ “Sense of Inclusiveness” に基づいた発表テーマ選び、調査、資料準備を行った。そして、8 月 1 日に中山大学とチョンナム大学の学生が来日し、対面での交流が始まった。大会開始までわずかな日数の中、大会の発表準備は急ピッチで進められた。8 月 2 日から 4 日までは BKC キャンパスの BBP 施設を使用して交流し、4 日から 6 日までは当キャンパスの国際寮（BKCi-house）を宿泊のために利用させてもらい、さらに交流を深めた。また、5 日は発表大会と国際交流イベント、6 日はアクティブラーニングセッションと表彰式に参加した。

3.2.2　国外事例における授業概要、到達目標、正課内工夫等

秋学期の授業名は、「Exploring Asian Culture via Project-based Learning（PBL in Sri Lanka）」とし、立命館大学のびわこ草津キャンパス（通称、BKC）で開講された。授業実施言語は、春期同様英語であったが、受講登録は基本的に正規生のみとした。シラバスに記載したこのクラスの目標は、プロジェクトベースの学習を通じて調査スキルを身につけ、グローバルな視点を獲得することである。入門と準備セッションを通して調査実施に関する知識を得ることができる。さらに、グローバルな視点を獲得するために、海外（スリランカ）の大学生と連携し、グループプロジェクトを体験することができることが大きな特徴である。このような目標を達成するために、受講生には、英語力だけに留まらず、リーダーシップスキルを発揮すると共に、立命館大学側の他のグループメンバー（国内のピア）のみならず、海外大学のグループメンバー（スリランカのスリジャヤワルダナプラ大学（USJ）のピア）とも積極的にコミュニケーションを取りながらグループプロジェクトを完成させることを求めた。なお、プロジェクトのテーマは、グループメンバーの話し合いのもとで決定するよう指示し、内容については指定せず広範囲にわたって選択できるようにした（例えば、東南アジア、グローバル、熱帯、政治、経済、教育、科学、二国間関係、日本、文化、社会、植民地、観光、開発、多文化共生、食、宗教（ヒンドゥー教、キリスト教、仏教、イスラム教）歴史、戦争、SNS, 等）。コース終了後には、現地での調査の機会も設けた。また、春期授業の課題として挙げられた学生のシラバスの理解度については、シラバスの説明には「受講登録する前に「受講および研究に関するアドバイス」を必ず読んでください」と追記した（詳細は、http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/kyomu/gaku/onlinesyllabus.htm 参照）。

受講生の到達目標に 4 つの具体的な小目標を掲げた。第 1 に、フィールドワークプロジェクトの立案、予備調査、データの収集と分析、レポート作成ができるようになる。第 2 に、日本と他の国（スリランカ）との社会的な問題を比較することができるようになる。第 3 に、ピアラーニングのスキルを向上させることができる。そして第 4 に、英語を使って異文化間の理解とコミュニケーションスキルを深めることができることである。なお、授業言語は英語であるため、言語能力基準は、TOEFL ITP® 400 ～ 480、TOEIC® 380 ～ 580 等同スコア程度を想定し、受講登録の

際には各自の言語スコアを確認した上で手続きをするようシラバスに明示した。成績評価は、プロジェクト準備・貢献、プロジェクト発表、小論文とした。従って、受講生には、グループワークに積極的に参加すること、プロジェクトの発表のための知識をしっかり身に付けること、最終的に個人で小論文執筆ができるようになることを求めた。春学期同様、この授業においても受講生のアクティブラーニングを促進するために学内の TA 制度を活用し、BKC の博士後期課程に所属する留学生を一人採用した。

当初の授業の予定では、最初は、グループワークを通して学術的に研究調査を行うためのノウハウを身に付けていき途中から海外大学のピアと遠隔交流を行うことを目標にしていた。その一方、準備・計画の段階では、海外フィールドワークに必要な準備に受講生も関わってもらうための工夫を行った。その大きな理由は、受講生が将来的に海外留学や旅行を考える際に、自ら計画し準備することができるようになってもらうためである。

今回の海外フィールドワークのために、筆者が以前から faculty development（FD）や個人研究の関係で親しくしているスリランカの USJ 大学の教員と交渉し、日本からの学生の受け入れを依頼した。訪問日程や基本的な活動等は立命館大学の授業担当教員が先方大学の担当者と話し合い、適宜受講生と情報交換をした。また、スリランカを訪問する際に学生の案内とサポートを担当してくれる現地大学生（通称、バディー）も手配していただき、訪問する前から連絡がとれるよう接点を強化した。なお、海外フィールドワークの素案をシラバスで公開し、学生が受講登録を検討する際の判断材料とした（付録 2 参照）。しかし、国内で遠隔操作による交流のみに参加を希望する学生の要望に応えるために、海外渡航は受講登録の必須条件としなかった。

結果、10 名の学生が受講登録し、うち 9 名が海外渡航に参加する意志を示した。言うまでもなく、海外フィールドワークの準備は多岐にわたる。海外渡航を予定した受講生にはペアワークの一環として、スリランカ入国許可に関するもの、海外渡航前の健康検査に関するもの、渡航の際のルールや規定に関するもの、海外で使用できる Wi-Fi と携帯電話機の貸し出しに関するもの、海外旅行保険に関するもの、各グループのフィールドワークに関するもの、その他、見学場所の提案と確認などを行ってもらった。航空券、宿泊、現地の団体移動手段、大学での講義及び発表などに関する項目はすべて担当教員が執り行った。また、各回において、学術的な調査をするために必要なノウハウをテーマ選びから成果報告までの過程に属する項目別に紹介し、グループワークと個人ワークを通してスキルを磨いてもらった。そして、学期末の最後に授業の振り返りを行い、授業アンケートの 6 項目を基に受講生に教室内活動を評価してもらった。

2.3　結果

以下、表 1 では春秋学期の授業アンケートの結果を示した。

表 1　春学期と秋学期の授業アンケート結果

評価項目・学期	春期（回答率 73.7%） クラス平均 / 分野平均	秋期（回答率 30.0%） クラス平均 / 分野平均
Q1 シラバス導守度	4.7 / 4.6	3.7 / 4.6
Q2 授業外学習時間	2.3 / 2.2	3.8 / 2.2
Q3 学習意欲の促進	4.1 / 4.1	4.7 / 4.2
Q4 能動的学習態度	4.4 / 4.3	4.3 / 4.4
Q5 到達目標達成度	4.1 / 3.9	4.0 / 4.1
Q6 学び役立度	4.4 / 4.3	4.7 / 4.4

春学期の授業では、授業アンケートの回答率は 73%に達しており、全体の 7 割以上の受講生の認識を反映している有効な評価として考えられる。表 1 で示した通り、授業アンケートの Q1 ～ Q6 までの大半の項目において分野平均より高い評価を得た（5 段階評価）。Q3 の “ 学習意欲の促進 ” においても分野平均と同等な評価となっており、全体的な取り組みとして受講生に高く評価されたといえる。一方、秋学期の授業アンケートは、春学期と比較して大きく異なる結果となった。まず、回答率は著しく低いことが判明した（30%）。また、Q1、Q4、Q5 は分野平均より低い評価となった。しかし、Q2、Q3、Q6 では当該授業の評価は分野平均より上回っていた。

まず、春学期の授業内活動に対する評価は表 1 で示している通り分野平均より高い、もしくは平均点数と同等なものである。従って、KIC においては今回の授業内において導入した学習項目や活動は今後も継続的に実施できることが示唆された。しかし、ほぼ同様な内容であったにも関わらず、秋学期の授業評価は異なっていた[3)]。まず、シラバスは提案した通りに進んだものの「シラバス導守度」の評価は、分野平均より下回った。その原因として考えられるのは、当初予定していたスリランカ現地の大学生とのコラボレーションが学期中にうまくいかなかったことである。背景には様々な理由があるが、その最大の問題点であったのは、スリランカ現地大学の諸事情により予定していた現地バディーとの連絡がうまく取れなかったことである。そのため、授業内のピアとスリランカ現地のバディーと進める予定だったグループワークを授業内のピアのみで行うことに変更して取り組んでもらった。次に、「能動的な学習態度」と「到達目標達成度」も分野平均より低い評価となった。今後、これらの項目においては、学生の学習意欲の向上と、学習の到達目標がより明確にできるよう工夫していきたい。また、今回の評価の差異にはキャンパスの特徴も背景にある可能性が考えられる。次に、参加したそれぞれのプログラムにおける計画と準備及び成果について、プログラム全体を担当した教員の実体験と参加した受講生の感想と振り返り資料を基に正課外活動への評価について情報共有を試みたい。

4.　省察

今回の取り組みの目的は、正課内における日々の学びと学習成果を正課外の活動に取り入れる

ことでより深い学びと成果に結び付けることであった。今回の取り組みで、春学期と秋学期では日本国内と国外における正課外活動を実践した。

春学期の取り組みにおいて、参加計画を実行する前に担当教員が2019年4月に行われた初回のWYMの実行委員会に参加し、立命館大学の学生参加についての了承を得た。国際発表大会は8月5日（開会式、発表、交流会）と6日（アクティブラーニングセッション、表彰式、閉会式）に予定されており、授業では、大会での発表の準備に向けて参加者を決定した。授業内での準備を進めている間に国際交流を行うパートナー校を決定し、SNSを活用した遠隔操作による国際的学術交流がスタートした。この交流は、2019年4月～8月（4月から7月末まではオンライン交流、8月は対面交流）の期間で行われた。遠隔交流は学生にとって刺激的であり、会ったことのない相手との上手な意見交換、文化の違いや英語使用に関する問題等数多くの壁にぶつかりながらも、諦めず準備を進めた。最後に8月1日から来日したゲスト校のメンバーとそれぞれのグループで準備を急ぎ、8月5日に発表を行い、さらに6日のアクティブラーニングセッションも実施した。大会は、愛知県にある日本福祉大学と滋賀県にある立命館大学で開催された。今回の立命館大学と交流校のメンバーは、2グループ「立命館大学3名＋台湾中山大学1名、立命館大学3名＋韓国チョンナム大学2名」でBKC会場の大会に参加し、プラティナム賞とゴールド賞を獲得した。参加した学生は、最初から最後までやり遂げたことで、達成感も得られ、異文化交流を兼ねた学術交流ができた貴重な機会だったと振り返っていた（詳細は、付録3を参照）。

一方、秋学期の取り組みでは、海外フィールドワークは授業が実際に開始される一年半前から計画された。海外の交流校との調整には時間が要すると考えたからである。しかし、先節の後半で記載した通り、交流校のバディーとの連絡がうまく取れなかったことが、海外でのフィールドワークの準備を予定していた受講生にとって大きな課題だった。そこで、授業継続に支障がでないよう、まずは日本国内での調査に切り替え、各回で紹介する学術的な学びの応用ができるよう工夫した。なお、国内で選ぶテーマは、海外フィールドワークのときにも使えて対照的に捉えられるものにするよう指示した。授業の回数を重ねるたびに受講生も研究調査に関する基本的な考え方を徐々に身に付け、海外遠征に必要な準備も少しずつ整えていった。秋学期の授業も無事に終了し、出発まであと一週間と迫ったその時再び問題が発生した。世界のあらゆる個所に悲劇をもたらしたコロナウイルスの流行が始まった。出発の直前まで海外フィールドをやめるか否かをテレビニュースや学内の情報を基に慎重に検討した。出発日まで渡航を取り辞めることを伝える学内の案内もなく、日本国内においても特に厳重警戒とはなっていなかった。しかし、万一のことを考え、参加者全員の安全と安心のために、マスク・消毒用アルコール・手袋などを準備して持参するよう指示した。いよいよ出発日を迎え、無事にスリランカに着き、フィールドワークの遠征を開始した。

海外フィールドワークの団体が予定通りスリランカに到着し、次の日の予定のため現地大学に向かった。当初予定していたプログラムは実施できたものの、一つ問題としてあったのは、参加予定のバディー達の一部がコロナ感染防止のため参加できなかったことである。しかし、その他の大部分において計画通り進めることができ、参加した学生も自身が考えていたフィールドワークを完成させることができた。出発の日の朝の発表会においては、現地大学生を交えた発表会を実施し、質疑応答その他意見交換をすることで交流を深めた。海外フィールドワークを終え日本

に帰省後に、振り返り感想のために参加学生に二つの質問への意見を求めた。本取り組みにおいて学び得たこと、と今回の活動を今後の学習にどのように活かしていくかである（付録 4 参照）。

4.1　アクティブ・ラーニングからディープラーニングへの挑戦

今回の試みで強調している二つの概念としてアクティブラーニングとディープラーニングが挙げられる。大学で実施する正課内の活動はアクティブラーニングを念頭に導入され、受講生自らが積極的に参加することを促している。個々の授業の各回の学びを通して期待される到達目標において、学術的な調査研究のノウハウが理解でき、自ら実行できるようになることが重要である。従って、授業では、学生に対して調査テーマの設定、調査の計画と準備、調査実行・データ集約及び分析、文書・口頭による成果報告を実施する。そして、大学外で参加する正課外活動において学習した内容を適応させ、学内での学びを基に新しいことに挑戦する。いわば、大学の教室という一つのコンテキストから大学外というもう一つのコンテキストに既存の学習を転送して適用させる。言い換えれば、アクティブラーニングで獲得した知識を次の目的のために転送することができた事例であり、とりわけアクティブラーニングからディープラーニングへの橋渡しができたと考えられる。

まず、春学期の取り組みでの学びを取り上げたい。WYM は、遠隔操作を基に学内外のピアと交流を行い、大会テーマに沿ったサブテーマを決定し、大会当日に行う発表に向けて準備をする必要がある。このテーマ設定から発表するまでの過程において行う学術的交流はすでに授業を通して身に付けている。また、海外の大学のピアと交流する際に必ず直面する言語と文化による課題も、学内での学びの際にある程度経験している。また、秋学期の取り組みで行った海外フィールドワークの事例についても同様なことが言える。しかし、これら二つにおいて、大学内コンテキストと大学外（国内と国外）コンテキストの活動場所の背景が大きく異なる。例えば、WYM の発表は、普段の授業で少人数の前で行う発表会と異なり、視聴者は何百人単位のものである。学生は、大きいステージ上でスポットを当てられた中で発表を行った。また、発表後に実施したアクティブラーニングセッションでは、多数の視聴者から出題された質疑にしっかりと答えることができた。同じく、秋学期の海外の大学を基にしたフィールドワークと発表も、普段から慣れ親しんでいる環境と違う環境の下で行った。付録 3 と 4 の参加者の振り返り感想文に記載しているように、これらのコンテキストの違いがとても良い刺激を与えたに違いない。また、これらの学外での挑戦に挑んだことで、学生にとって今後への課題も見つけることができた。これより、英語によるコミュニケーションスキルの上達はもちろんのこと、学術的な調査研究のさらなる練習、大学の勉強や他の活動に取り組む姿勢・態度などにおいても再度考えさせられるよい機会となったといえる。

そして、学生に参加を促し、大学外の引率を担当したことは教員にとってもよい経験となった。授業内で導入する学習項目を大学外で受講者が実践してくれることで内容の質・レベル・量等の調整が可能になる。そしてなにより、受講生の学外での挑戦を隣で見守ることで自分が教えた学習内容が実社会でどの程度通用するかを明確に把握することができる。今回参加したプログラムは担当した教員にとっても新鮮なものであった。春期の WYM 参加の取り組みは、すでに存在するものであったため、学生を参加させるためのハードルは秋学期に実施した海外フィールドワー

クの取り組みと比較して低かったことには課題が残った。今回教員自らが提案・計画・準備し、実行に移ったので多側面において負担が大きかったものの新たな教育領域のノウハウを多く学ぶことができた。

5. 結論

本稿では、大学の正課授業に付随して行った正課外活動への試みについて報告した。大学生の正課外活動は、日頃の学びにおける学習成果を高め、ディープラーニングにも繋がることが今回の取り組みからも言える。さらに、正課外活動は、国内外生を混合することで学生には異文化交流や国際理解にも視野が広がり、国際的な学術交流も可能とすることが分かった。今後は、このような取り組みをよりスムーズにできる体制を整えて再挑戦したい。そして、学生が大学で獲得する学びの内容を学外でのディープラーニングに繋げられるようサポート体制を強化しいていきたい。

謝辞

本実践において、本学と海外大学の学生参加者及び教員、B 群科目の主管である衣笠国際課、国際寮（BKCi-house）ご担当の BKC 国際課及び TS 科目主管である教学部 共通教育課の方々にお力添えいただきました。また、本論の執筆において山岡憲史先生（教育開発推進機構）にもたくさんのアドバイスをいただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

注

1） World Youth Meeting（WYM）は、1999 年より、毎年 8 月に開催され、今年で 20 年目を迎える取り組みで、日本の中学校・高校・大学を含む数多くの国が参加している。WYM は、参加する学生にとって、異文化理解を深めることや、ICT 活用、コミュニケーションに重点をおいた英語を体験できる貴重な機会である。また、実行委員として参加する学生は、英語を介して国際交流の企画運営に関するノウハウも獲得できる。当大会の一日目は、基本的に各交流グループの英語による発表会（8 分の発表と審査員からの質問）及び国際交流イベントを開催される。そして、二日目は、少人数の部屋で再度発表し、視聴者からの質問に答えるもので初日と違ってよりディスカッションに近い形をとっている。詳細は、http://www.japannet.gr.jp/ にて参照のこと。

2） SKP（Study in Kyoto Program）は、立命館大学の留学生受け入れプログラムの一つで、海外の大学の所属する学生を短期的に受け入れているものである。

3） そもそも、回答率は 3 割の評価を基に議論を進めるには少し無理があるが、せっかく評価していただいたので、今後の改善に繋げる意味もあるためここで意見を共有する。

参考文献

荒川洋平―「日本における英語イマージョン教育の論考」東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 30、2004 年、105-122 頁。

佐藤敬二―「正課外活動を通じた学生の成長」2010 年、28-29 頁。http://www.ritsumei.ac.jp/~satokei/Research/2010/seikagaikatsudou.pdf（最終アクセス日は、2020 年 5 月 26 日）。

カンダボダ P.B、石川涼子、筆内美砂、村山かなえ、羽谷沙織―「大学内における学生の正課外活動への

支援体制と課題―BBP での実践を題材に」『立命館高等教育研究』 立命館大学、2020 年、115-136 頁。
カンダボダ P.B., 鳥居朋子―「共修を目的とした英語で開講する授業におけるアクティブラーニング促進の実践と課題」。『立命館高等教育研究』立命館大学、2020 年、137-152 頁。
Borredon, L., Deffayet, S., Baker, A. C., & Kolb, D."Enhancing deep learning: Lessons from the introduction of learning teams in management education in France." Journal of Management Education Vol.35、No.3、2011、pp.324-350.
Cleveland-Innes, M. F., & Emes, C. "Social and academic interaction in higher education contexts and the effect on deep learning."NASPA Journal, Vol.42, No.2, 2005, pp.241-262.
Ito, H., "Rethinking active learning in the context of Japanese higher education," Cogent Education, 2017, Vol.4, No.1, pp.1-10.DOI: 10.1080/2331186X.2017.1298187.
Scoffham, S., & Barnes, J."Transformational experiences and deep learning: The impact of an intercultural study visit to India on UK initial teacher education students." Journal of Education for Teaching, Vol.35, No.3, 2009, pp.257-270.
Tanaka, K., & Wake, I., " 日本の大学における英語イマージョン教育の成果 ." 国際学研究 42, 2012, pp.19-48.

引用文献

Higher education（2019）https://www.advance-he.ac.uk/knowledge-hub/deep-learning より 4/11/2020　引用
MEXT.（2017）「新しい学習指導要領の考え方 ―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ」2020 年 4 月 8 日引用（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf）
立命館大学オンラインシラバス　http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/kyomu/gaku/onlinesyllabus.htm

付録 1　オンラインシラバスと改正版

1.1　オンラインシラバス

回	内容:キーワード
1	Orientation: course objectives – 0bjectives、individual goals
2	Theme and group settings – peer-learning, collaborative learning, rolls
3	Survey preparations – conducting survey, individual rolls
4	Conduct survey – survey ethics, rules
5	Reflection - progress, points to reconsider
6	Analysis methods – kinds of data and methods of analysis
7	Presentation preparations – presentation skills, points to reconsider
8	Peer-learning session using ICT – what is ICT, differences in language & cultures
9	Reflection in presentations – confirm rolls, other issues
10	Practice and peer-review – what is peer-review, practice and find problems
11	Practice for Q&A - practice, cooperation, improvements
12	Constructing report contents① – contents of the report, section rolls
13	Constructing report contents② – ICT tools, APA style
14	Report submissions – confirm content, share information
15	Overall reflection – learning outcomes, future learnings, recommendations for Private Study

1.2　改正版

Class	Date	Non-committee groups	Committee groups
3	23rd APRIL	Survey preparations 1. Presentation contents and requirements, goal and thesis statement, theme selections (main topic & sub-topic)	
4	30th	Survey preparations 2 Individual roles, introduction and related studies	
5	7th MAY	Survey methods & analysis	
6	14th	Interim reflection – presentation skills	
7	21st	Survey day	Survey day
			Contact the peers in Taiwan and do the needful
8	28th	Discussion and conclusion	Discussion and conclusion
			Same as Above
9	4th JUNE	Peer-learning and peer-evaluation	Peer-learning and peer-evaluation SA.
10	11th	Group presentations sessions 1&2 *committee groups to present first	
11	18th	Group presentations 3&4	
12	25th	Group presentations 5 and report contents	
13	2nd JULY	Report outline	
14	9th	Report submission	Check presentation contents
15	16th	Overall reflection	Confirm schedule

＊「改正版」の第 1，2 回は、オンラインシラバスと同様な内容で実施した。

付録２　海外フィールドワークの素案

訪問期間：2020年2月２日（日）～2月８日（土）
スケジュール（変更の可能性有り）
２日 － 日本出発、スリランカ到着
３日 － オリエンテーション:講義（スリランカの教育制度）、
フィールドワーク実施
４日 － フィールドワーク:フィールドワーク実施、
スリランカにおける異文化と宗教に関する視察
５日 － フィールドワーク:フィールドワーク実施
６日 － フィールドワーク:世界遺産を探検（シーギリヤロック）
７日 － スリランカでの調査に関する発表、歓送会
８日 － スリランカ出発

付録３　WYM 参加学生の振り返り感想（抜粋）

“Through this WYM, I was able to find areas where I needed to improve in various areas such as presentation, action, knowledge and so on. And I could get many ideas about the presentation while watching the presentation prepared by others, and I could hear many interesting stories about the topic. Preparing for presentations with international friends during the tournament was not easy. But I think we were able to finish the presentation successfully because we tried to be considerate and approach each other little by little. It was a good experience to feel once again about the importance of consideration and dialogue among people”

“After the competition, we got a gold prize. I think it's a valuable experience more than anything because I learned a lot about cooperation, communication methods, the preparation process for presentation and so on in preparing one presentation with（氏名省略）. As I said earlier, this competition was a stimulus for me. I will study English hard and try to use all my abilities before participating in other international competitions as well as WYM later. And I will have enough conversation with my team members in the preparation process for the presentation”

“I was very nervous for this presentation because I have never done this kind of presentation.....Experience of the practice led to my confidence. The day of presentation I could present without almost all nervous. This experience gave me many important things for me”

“I managed to make a speech without skipping or forgetting any lines. After the presentation, my mind was filled with accomplishment. Though, our team lacked communication outside the class, by the time the presentation was over, we all praised each other for the good work and naturally the conversation followed along. Also, some other schools approached us for being fluent in our speech and told us how they enjoyed it. This meeting was something more than I was expecting and had lots of fun in the overall process. I hope to make use of this experience throughout the university life and more”

“We were able to convey our core message to the listeners through our presentation.”

“In our case, we discuss much more frequently after we actually met in Japan. The most important thing I learned from the event is how to achieve the same objective with people you can barely say acquainted. It requires empathetic leadership, mutual trust, and a heart to appreciate. Before I arrived in Kyoto, I found myself too nervous and demanding since for me and our school everything has to

start over. But things turned out opposite and proved there is no need for too much concern, I soon discovered Ritsumeikan is a very pleasant and responsible partner. ...The main focus never is whether our presentation will be awarded. I believe once we work on something wholeheartedly and engage in so hard, the result usually won't disappoint us"

付録４　海外フィールドワーク参加学生の振り返り感想（抜粋）

1. 本取り組みにおいて学び得たことをまとめてください。

“今回は授業でまず、自分の興味範囲から調べたいことを決めて、学術的な資料を用いて調査を行い、また、アンケート調査も活用しながら、事前に日本の状況はどうかを明確にすることができたため、現地調査においても比較がしやすく、より深い調査を行うことができた。。。。。この授業の大きな利点は実際に現地に赴いて沢山の貴重な経験をすることができることだと思う。わたしは、今回のフィールドワークでスリランカの英語教育についてだけでなく、食マネジメント学部の学生としてスリランカの食文化であったり、マーケットの多さや特徴、気候、文化的、歴史的側面についても学ぶことができた。”

“…今回のフィールドワークで、現地の学生や人々、実際の様子を自身で感じることの重要性を感じることができました。”

“…日本にいて学んだ知識がさらに深く培っていった。逆に発見も毎日あって、これらは現地でしか味わえないものであるので充実した１週間を過ごすことができた。”

“スリランカでの活動前にも日本で航空券、旅費の支払い、Wi-Fi の予約、VISA の取得、保険の加入など１から私たちで行って個々人の責任力もついた。また、現地の滞在先では私は留学生と同じ部屋になり、互いに言語を教え合えたことが良かった。また、生活の違いもあり、考え方、捉え方、感じ方なども変わった。大学生になって滅多にない集団行動もみんなと生活していく上で大切だが難しいと改めて感じた。衛生面でも、流行病などもあり日本にいるときよりも敏感になって注意深く予防することができた。”

2. 今回の活動を今後の学習にどのように活かしていくかをまとめてください。

“今後の学習では、今回学んだ現地調査の重要性を理解したうえで、事前学習も自ら率先して行なっていき、今回興味を持ったスリランカの食文化や幸せの感じ方などについて調べていきたい。…この授業をただの授業の一つで終わらせるのではなく、次の活動につなげていきたいと考えている。”

“今回の活動では、すべてとは言わずとも、フィールドワーク関連の情報収集や予約、契約など私たち自身での選択や行動が求められたため、今まで頼りきっていいたことを私たち自身が行うことによって苦労や要領などが垣間見れたので、今後のフィールドワークや海外への渡航に生かせればと思います。”

“今回期待以上のことを学んだので、自分の生活の見方を変えてものごとを考えて行動に移していきたい。実際に自分の目で見て確かめることの重要性がわかったので今後フィールドワークをするときにも役立つと思った。”

“僕は今回のフィールドワークでプレゼンテーションの内容以外にも、スリランカの伝統的な文化を知ることができたことが一番大きかったと思います。”

Fostering Deep-Learning among University Students: from In-class Learning through Extra-curricular Activities

KANDUBODA B. Prabath（Ritsumeikan University, Ritsumeikan International）

Abstract

This paper reports the attempts made to ensure students accelerate learning outcomes that foster deep learning skills outside university premises. Previous studies suggest that university students' extra-curricular activities expand in-class learning outcomes. Extra-curricular activities can also help students broaden their perspectives on cross-cultural exchange and international understanding in addition to academic exchanges. This paper shares empirical evidence in promoting students' educational and international exchange. Especially that involved both domestic and international students focusing on two courses offered under the Theme Study class scheme in the Ritsumeikan University, Japan. In particular, this study introduces two distinctive extra-curricular activities that linked students' active learning to deep learning. It is hoped that this information will provide insight for teachers and staff for future lesson implementations in the same regards.

Keywords

Learn by doing, international academic exchange, intercultural understanding, leading student excursions, deep learning